P－19

ドライバーからみたやまなみハイウェイの景観特性に関する研究

〇金子 晶　麻生 恵　町田怜子

シークェンス景観とは、視点が空間の中を移動するとき、その視野に次々と連続的に展開していく景観のことをいう。それは、日常的な見慣れた風景を今まで考えられもしなかった視点や角度から眺め、体験するという喜びであった。人をひきつけるような観光道路の快適性は、その道の景観に大きく関わっている。

しかし、九州横断道路(やまなみハイウェイ)の沿道景観は、地域住民の高齢化や畜産農家の減少により、草原の維持が難しくなり、国立公園としての景観が損なわれている。本研究では､シークェンス景観を楽しむことを意図したルートが開発された九州横断道路(やまなみハイウェイ)を対象とし､ドライバーがシークェンス景観を楽しむ草原の景観構造と国立公園指定時からの景観変遷(草原の藪化・植林地化等)との関係性を明らかにする。また、現地調査として車内にビデオカメラを設置し夏と冬の景観を撮影した映像から運転が快適だった区間、悪かった区間を判断し地図上に記号化する。そして、ドライバーの視点からみた魅力的なやまなみハイウェイの沿道整備のあり方を提言する。

P－20

災害時要援護者における避難体制の課題とあり方に関する一考察
～ホテル火災避難訓練をもとにした検討～

〇豊見山 佐妃、荒川 雅志〔琉球大学大学院観光科学研究科〕
親川 修〔NPO法人バリアフリーネットワーク会議〕

キーワード：災害時要援護者　避難体制　火災　ホテル

日本は、急速な超高齢化社会および障害者の人口割合も年々増加傾向にある。観光レジャーの先進地沖縄県は全国で始めて「観光バリアフリー宣言」を施行し、誰もが楽しめる、やさしい観光地づくりに力を入れてきた。本研究は、観光レジャーにおける避難体制の観点からバリアフリー化を推進する取り組みとして一施設（ホテル）を対象に、これまで作成した「逃げるバリアフリーマニュアル」に基づく実証実験を行い、参加者へのヒアリング、アンケート調査を実施した。

実証実験は火災を想定し、災害時要援護者（高齢者、肢体不自由者、視覚障害者、聴覚障害者）と避難誘導を指揮するホテル従業員で行い、それぞれで異なる避難誘導の実施や避難機器（機能）の使用から、どのような避難体制の確立が必要であるかを探った。ヒアリングやアンケート調査の結果、災害時要援護者それぞれで正しい知識を習得しておくことが基本とされ、情報伝達や声かけが重要であることが明らかになった。計12個の避難機器等を使用したが、おんぶ隊プラスを除く全てが平均してプラスの評価を示しており、このような機器等を各事業所が保有し使用方法の反復を行うこと、そして定期的な避難訓練の実施が観光レジャーシーンにおける緊急時・災害時の要になることが読み取れた。